

Handbook of Research in Second Language Teaching and Learning VolumeIII

Chapter 14 Technology in Language Teaching and Learning

発表の構成

- 1、著者情報
- 2、論文の構成
- 3、論文の要約
- 4、参考文献

【おねがい】 このレジュメは,東京学芸大学大学院国語教育専攻 日本語教育 コースの授業「日本語教育方法論演習」(授業担当者: 南浦涼 介)での大学院生で取り扱った,Hinkel, E. (Ed.) 2017. *Handbook of Research in Second Language Teaching and Learning*. の発表のレジュメです。 教育的価値,資料的価値としてウェブでの掲載を行っておりますが,いわゆる「論文」ではありませんので,論文等への引用 や掲載は固くお断りいたします。 また,分析対象の著作権は著 作者,資料文書の著作権は発表者に記しますので,無断転載は ご遠慮ください。 質問については,東京学芸大学南浦研究室 (<http://minamiura-lab.com/>)までお願いいたします。

1、著者情報

Greg Kessler

オハイオ大学の言語学科准教授

研究分野: 言語教育 コンピュータ支援言語学習

著書情報: 『Technology in second language teaching and learning』

『Language teacher education and technology』

『Telecollaboration in the Secondary Language Classroom: Impact of an International Blogging Project』

2、論文の構成

英語	日本語訳
① Statement of Purpose	文章の目的
② Traditions in CALL	CALLの経緯
③ Trends	動向
④ Controversies	論争
⑤ Conclusions /Future Directions	結論/今後の方向性

CALLについて

CALL: Computer Assisted Language Learning コンピュータを使った言語学習のこと。
CALLの概念には、教室授業において利用されるものも、自宅での自己学習に利用されるものも含まれる。教室授業においても、近年、コンピュータ・ラボを使った外国語学習クラスなども、極めて当たり前の情景として見られるようになった。

3、論文の要約

① 文章の目的

この文章では言語教育における技術面の役割を概説している。この技術面の役割に関する研究はコンピューター言語学習と呼ばれているが、この用語の使用について多少の論争がある。この分野は長年にわたって、多様化しており、多くの学問分野と同様に、言語分野、教育分野、心理学分野と深く関係がある。

② CALLの経緯

CALLは教育学、言語学、心理学、工学などいろいろな分野から影響を受けた。Levy and Stockwell (2005) CALLを研究するため、いろいろな方法と理論的なものを確立した。たくさんの方を通して、言語教育の中の技術利用を観察できた。そして、研究者も言語教育の技術利用の複雑さを意識してきた。

今のCALL研究はただのデータ調査で観察するだけではなく、主に具体的な状況で教師と学習者の行為を観察する。そして、今のCALL研究は、幅広い研究課題に取り組むのではなく、さらに具体的な立場に焦点を当てている。

現在のCALL研究はかなり成熟した、複雑な領域だと言えるが、まだまだ色々な困難なところがある。その中、技術的な要因も人為的な要因もある。これらの状況の中には、個別の学習者と教師の特性、環境の状況などがあり、CALL研究の成功や失敗の重要な要因となることが多い。

③ 動向

(1) Mobilityー移動性

現在、私たちの日常生活の中で、モバイルデバイスの使用率が増加しつつある。その影響を受けたため、数年前にモバイルアシスト言語学習 (mobile assisted language learning) MALLという用語が作られた。確かに、このようなモバイルデバイスは会話と語彙の学習にいいところがあるがもっとも重要なところが学生に親近感を持たれ、常に利用されるのが可能であるということである。ただし、教師はモバイルデバイスを利用する際、学習者が学習以外の目的を持って利用するのを注意すべきである。

モバイルの最も重要な側面は学生の口頭会話の語彙量を増やすことであるが、モバイルを使用して、語彙量を増やすことをサポートしているが、教師はモバイル学習への関心が高まっていることを認識しなければならない。

(2) Digital Worlds and Pedagogical Perspectivesーデジタル世界と教育的視点

メディアの成長は、個人の生活の中で、コンピューター媒介コミュニケーション(CMC)を通じて、コミュニティーの構築に参加することを強く要求している。しかし、このような開発が最終的に我々の社会や言語生活にプラスの影響を与えるかどうかはまだ明らかになっていない。Carr(2010)では、紙ではなく、画面では、私たちが深く考えることができなくなっていると主張している。

学生のモチベーションの重要性はこれまでに認識されており、多くのCALLの研究の共通点となっている。CALL研究の実践がとくに移動性の機会を提供する際に、学生のモチベーションにプラス影響を及ぼすという研究が実施されている。

(3) Collaborationー共同作業

共同言語学習は道具の一つとして、言語学習をよく理解し、サポートするのが一般的である。学問的な文章を書くときや知識を再構築するとき、協力作業は学生をサポートすることができる。今メディアを使って、言語学習をサポートすることが可能であるが、最適な学習環境を作るために、どのように活用できるかまでわからない。さらに、いろいろなリソースを利用した共同作業の設計はこれまでの研究がほとんどなかった。

言語学習と実践のための有意義かつ本格的な機会を作るための社会的メディアとニューメディアの可能性があることが明らかであるが、最適な利用のために、どのように活用できるのかは、また、社会的メディアがこれらの特定の言語学習のコンテキストをどのように利用しているのかはまだ明らかではなく、社会とリソースを結びつけた協調的な活動の設計がこれからの研究の注目を集めている。

(4) Corporaーコーパス

言語研究におけるコーパスの使用は十分に確立されているが、これらのコーパスはまだ初期の調査領域である。インターネットを介入したコーパスの利用は、例えば、地図などの革新的な手段によって、私たちに圧倒的な豊富で多様な情報を提供することができる。今のGoogleでは、少なくとも1億6000万以上の文章があると推定されている。このような学術論文、このような非常に貴重なリソースはさまざまな活動を通じて利用できる。したがって、学習者も教師も自分が必要なものを見つけられるが、人の文章や著作を盗用する可能性も高まっている。

(5) Feedback and Assessmentーフィードバックと評価

デジタルツールでフィードバックを提供し、評価を行うのがたくさんメリットがある。しかし、言語教師はフィードバック目的のツールの有効性を評価するのではなく、個人の好みに基づいてツールリソースを選択する可能性が高い。そして、現時点では、デジタル

ツールでフィードバックがいつ、どのように最もよく伝わるかまだはつきり明らかになっていない。

(6) Learner Behavior and trainingー学習者行動とトレーニング

人間のコンピューターインタラクション (HCI) はさまざまな社会的及び教育的状況において、どのように技術を利用するか、教えてくれた。しかし、HCIはCALLの理解に有益な活動の一部しかとっていない。人間の行動の多くは言語学習、学習環境、学習課題及び、言語教育に役立つ。

Hubbard(2004)は学習者の視点から、CALLを体験するため、5段階のアプローチを作成した。

- i 教師は学習者の視点から、「センス」を発達させる必要がある。
- ii 学習者に教員養成のトレーニングをさせ、「特定のCALL活動と学習成果を関連付ける」
- iii トレーニングを周期的に行い、「時間をかけて、簡単に忘れる点を教える」
- iv タスク目標と言語学習目標とのバランスを維持するための共同学習
- v 学習者にツールやプログラム間での譲渡が可能ストラテジーの一般化を指導する

(7) Telecollaborationー遠隔教育

遠隔教育はCALLの一つとして、現代社会で広く応用されている。遠隔教育の実践はより異文化間コミュニケーション能力を促進することができる。情報通信技術を習得するために設計されたもので、遠隔地からの学生、教師、そのたの文化情報のグループが相互に情報を交換することを可能にする。

④ Controversiesー論争

CALLの分野における用語は言語学習者と教授者の間誤解されている。時間が経つにつれて、変化しているので、特にCALLという用語の意味は、すべての読者には明らかではないかもしれない。CALLは過去数十年間の社会全体での技術の使用の変化を反映して、進化してきた。コンピューター技術が普及するにつれて、CALLは言語教育において透明化されるべきであると主張している。

言語学習と教授の技術の使用は今非常にすごく変化している。用語の問題に取り組むと、CALLという言葉の意味は変わるかもしれないが、世界でコンピューターに仲介されたCALLという言葉の使用を増加している。

(1) Privacy ,Tracking and Student Rightsー個人情報、追跡と学習者権利

今、教育者は学習者の言語の使用を追跡し、観察し、遠隔管理することができるが、個人情報の共有を必要とするオンラインツールの使用や学習者をサポートすべきの範囲について論争することがある。

(2) Automationー自動化

自動化の分野はすごく発展してきた。この分野は商業上に成功した。例えば、Google,Facebook,Appleなどの企業は斬新なデータの収集能力で世間の羨望や非難を受けている。これらの技術を再調整して、言語学習の領域に応用できる。例えば、自動化の道具を利用し、語彙の複雑さと多様化や文法の複雑さを評価できる。

④ 結論/今後の方向性

メディアやニューメディアを利用して、言語学習の機会を作ることが可能であるが、学習環境で、これらの技術をどのように活用するかまだはつきりなっていない。そして、特定の言語学習の場面において、メディアの利用をどのように調整しているかまだ明確ではない。さらに、これらのリソースを利用する共同活動や活動の設計についてこれまでの研究はほとんどない。でも、技術はいろいろな形で言語教育に影響を与え続けるだろうと期待している。

4、参考文献

<https://translate.google.co.jp/?hl=ja&tab=TT>